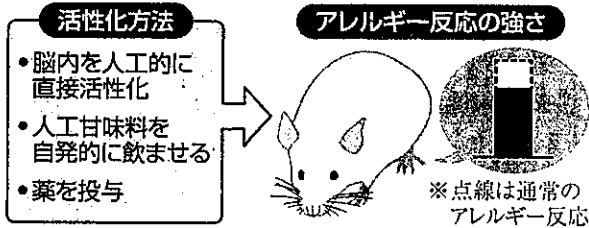


病は気から アレルギーも

山梨大・中尾教授らマウス実験

◆ドーパミン報酬系の活性化方法とアレルギー反応の強さの関係



症状 2、3割程度落ち着く

前向きな気持ちはアレルギーを改善させる――。山梨大医学部の中尾篤人教授（アレルギー学）らのグループは、前向きな感情をつかさどる神経ネットワークを活性化すると、花粉症などのアレルギー反応が抑えられることをマウス実験で確認したと発表した。「病は気から」という言葉を裏付けるように、心とアレルギー症状の密接な関係が浮かび上がった。

（渡辺洋介）

前向きな心と密接に関係

研究成果は20日、欧州アレルギー学会誌のオンライン版に掲載された。

中尾教授によると、花粉症やアトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患は、精神的なストレスで症状が悪化する。一方、アレルギー疾患の新薬の臨床試験では、前向きな感情が薬と関係なく効果を高め、新薬の効果の判定を難しくすることも

あるという。そこで研究グループは、メカニズムを明らかにするため、前向きな感情に関わる脳内の特定部位に着目した。マウスを使い、やる気をつかさどるドーパミン報酬系と呼ばれる神経を様々

な方法で活性化し、アレルギー反応の影響を分析した。

①マウスの脳内のドーパミン報酬系を人工的に直接活性化させる②マウスが好きな人工甘味料を飲ませ、脳内ドーパミン報酬系を自然に活性化させる③ドーパミン量を増加させる薬を投与する――の3パターンで実験。それぞれのマウスでじんましんのアレルギー反応を調べると、いずれも通常より2、3割程度症状が落ち着いていたという。

中尾教授はこれまでの研究で、アレルギー反応が不眠や食事の時間などに影響される体内時計に制御されていることも確認している。中尾教授は「アレルギー反応を抑えるには適切な投薬や日常生活の管理と同時に、前向きな気持ちを持ち続けることが大事だと示唆される」と話している。